事業提案型地域おこし協力隊「宮の羊の牧場」としての活動

宮野　洋平
（藤里町地域おこし協力隊）

1　藤里町の紹介

秋田県北部に位置する藤里町。人口約2,800人、人口の半分以上が高齢者であり、町内には鉄道や国道、コンビニはない小さな町です。

小さいながらも自然に恵まれ、町の約９割は山林という山間地。北西部には1993年12月に屋久島と共に日本で初めて世界自然遺産に登録され、今年30周年を迎える「白神山地」があり、太古から続くブナ林が蓄えた水がこの町のみならず、下流の市町を潤してきました。

ブナ観察学習林としての岳岱自然観察教育林や田苗代湿原が保全され、誰でも容易にブナ林・亜高山植物・湿生植物の観察ができ、観光シーズン中は人気のコースとなっています。

東京から町の中心部までは、羽田空港から大館能代空港まで飛行機で約70分、空港からは車で30分ほどと、意外とアクセスしやすいのも特徴で、白神山地ワイン、白神山水、まいたけ、サフォーク種ホゲット、あきた白神ラムなど、名産・特産品も数多くある町です。

（白神山地のブナ林）

2　羊が決め手

私は2021年４月に、藤里町の地域おこし協力隊として群馬県渋川市から家族４人で移住してきました。藤里町には縁も所縁もなく、世界自然遺産である白神山地に憧れを抱いていたわけでもありませんでした。移住を決めた一番の大きな理由は「羊を飼う」という目的があったからです。藤里町は、羊を30年以上飼育し、生産している町です。羊というマイナーな家畜にきっと理解、協力を示してくれる町だと思い藤里町に移住しました。

以前から、いつか自分の羊牧場を作ろうと考えていましたが、場所の選定はもちろん、経済的にも一時的には確実に収入が減るのでどのような形で牧場を作っていくのか、生活、事業資金、引っ越し、子供たちのことなど、様々な問題がいざ始めようとすると見えてきました。

ちょうど本腰を入れて牧場をどこで始めようかアンテナを張って、色々な地域を探していたところ、藤里町で事業提案型の協力隊を募集しており、これは千載一遇のチャンスだと思い応募し、採用、着任となり現在に至ります。

3　「地域おこし協力隊」と「就農者」

事業提案型の協力隊ということでどんな事業を提案したかというと、もちろん羊の生産牧場を作り運営していくという事を提案しました。簡潔に説明すると、羊肉の販売を軸として、副産物である羊毛・羊皮の販売、羊を利用した除

草（農地保全等）、観光牧場で接客等をしていた前職の経験を活かしての体験受け入れを行っていくという事業です。

私が提案したこの事業は、ほぼ畜産業（農業）です。私は協力隊という立場上、就農者の活用できる補助事業や資金を利用することはできず、農地の売買や土地を借りることもできません。このことは移住してくる前から分かっていたことでしたが、どのように解決していくか…。結論は妻に就農者になってもらうことでした。移住してすぐ、妻は就農者になり、自分たちの牧場の準備に取り掛かかってもらいました。

（夫：協力隊、妻：新規就農者）

４　１年目から現在まで

私は１年目、町の農業を知ること、農家さんと繋がるということからも、週に数回、町内の農家さんが集う産直、町営大野岱放牧場での業務に携わりました。空いている時間に自分たちの牧場の準備を進め、その年の８月には42頭の羊を主に北海道から仕入れ、「宮の羊の牧場」がスタートしました。大野岱放牧場付近の土地を借り、鉄パイプで仮畜舎を自分達で建設し、約１年間使いました。

周りの方々からは、「冬、大丈夫なのかその建物で…」と心配されながらも、「昨今雪は少ない傾向だったし、きっと大丈夫だよ…」と楽観視していたら、数年ぶりの大雪年。冬の間、仕事といえば畜舎周りの除雪と雪下ろしで１日が終わります。機械と心の準備がまだできてなかったので大変でした。

また、放牧地として使用するために、以前は畑として使われていた土地を２カ所、合わせて約５ｈａを借りました。電気柵を張り、羊の除草能力と草刈り機を使い整備を始めました。数年使われていなかったせいか草の丈は大人の身長を超えるような状態で、とても１年では終わらず、現在も奮闘中です。さすがに今年はトラクターも使い、草刈、堆肥の散布や牧草の種をまく予定です。

（1年使った手作りの仮畜舎）

（草を刈り始めた頃の放牧地）

現在は羊の全頭数も100頭を超え、仮畜舎のあった場所から少し離れた場所に本畜舎が完成しました。昨年は10頭ほどを出荷し、今年は30頭程度を見込んでいます。協力隊の任期を終える来年は100頭の出荷を目標にしています。

また、今年は毛刈り体験の受け入れ、ＨＰ上での羊肉・羊毛の販売、羊肉料理の提供にも挑戦しました。もちろん全てにおいて課題は沢山ありましたが、先のことを考えると、協力隊である間に経験できて良かったと思っています。

（完成した本畜舎内の羊たち）

５　おわりに

事業提案型の地域おこし協力隊として、あっという間に２年が経ち今年は最終年です。妻には移住初年度から就農者になってもらっていますが、私も任期を終えた後は就農者になる予定です。地域おこし協力隊という制度の目的は、定住、定着を図る国の取り組みです。市町村からは、それぞれ地域によってある程度の任務を与えられることが多いと思います。与えられたことをこなすことも大事ですが、自ら（家族）が３年後に定住、定着するために必要なことに任期である３年間で取り組み、退任後を見据えた行動をとることがより大切だと思います。特に農業関係での収益の確保は時間がかかることが多いので、退任後に生活ができる程度の事業計画を作ることと、協力いただく地域の方や行政機関、関連企業などとの関係づくりも必要です。幸いにも羊というマイナーな家畜に対して、羊を飼っている町のため、役場の方には親切に親身に対応していただきました。町民の方や近隣の農家さんにも良くしていただき、大変助かっています。今後の事業拡大や雇用の創出、地域社会貢献など、事業を継続し、収入を安定させ、定住していく事が微力ながら最初にできる私の「地域おこし」だと考えています。

＜担当者から一言＞

藤里町では平成26年から18名の協力隊を採用しており、現在４名の隊員が活躍中です。

恵まれた地域資源を生かせる事業者、プレイヤーが少ないという課題を持つ当町にとって、町出身者ではない外からの視点を持つ協力隊員の存在は大変貴重で、地域の賑わいや更なる発展、新たな発見や取り組みが生まれています。

今後も隊員・地域住民と共に、活気のあるまちづくりに努めてまいります。

（藤里町総務課企画財政係　佐藤　翔平）

（高台から町を望む）